

一次の文章は、作者が十代のKさんにあてて書いている、何通にもわたる長い手紙の一部です。読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

Kさん、前便の終わりのほうで私は、親と学校の先生以外の大人を知らずに大きくなっていく人々が多いことに驚いておりました。その実態を①チヨウサしたわけではありません。高校九年、短大三四年の計四三年間、若い人たちと日々接してきたの②実感でしかありません。「おまえなんかの知らないところで、自分たちはいろんな大人に会ってるわい」と反論があるかもしれません。実際そのとおりかもしれません。インターネットの世界でも、若者たちは私が若かったころよりはるかに多くの大人の言動に接しているでしょう。

でも、私が案じているのは、心から尊敬できる人間にどのくらい会っているか、心をふるわせられる人との出会いをどれくらい体験しているかということです。それというのも、尊敬する人は？と尋ねたとき、私のこれまでの経験では、返ってくる答えのほとんどが親だからで、親を除いてというと、わずかにあがるのが部活動の顧問の先生。その二つを除くと全くと言っていいほど出てこないからです。入学の面接試験のときなどにも、私はよく尋ねました。これまで読んできた本の中で出会った人物でもいいから、親以外にだれかいないか、映画のキャラクターでもいい、と。それでも若い人たちの口から、尊敬する人物、心ひかれる人物の名が出てくることはまずありませんでした。

三、四年前のある夜のこと、TV番組でどうやって社員を③サイヨウするかについて、さまざまな人が語っていたことがあります。番組のタイトルも局も記録しておかなかったのですが、その中である企業の経営者の方が、尊敬する人は？と尋ねて、親を出してやる若者はサイヨウしないと決めていると答えておられ、私はひとりTVの前で④はく手してしまったものでした。

⑤親を尊敬することが悪いと言っているではありません。若い人たちの言っていることが必ずしも、うそだとも思いません。いえ、大半は、本当に親御さんを尊敬しているから、そう答えたのでしょう。中には、考えることが面倒で、あたりさわりのないことを言っておけばいいと思って親をあげた人もいるでしょうが……。

⑥、と私は問いたくなるのです。それがあなたにとって世界のすべてなのかと。

なぜ親御さんを尊敬するのかと問えば、私の出会ったほとんどの若者は、自分を育ててくれたからと答え、仕事が忙しいのに、自分の面倒をよく見てくれたからと答える。私はそんな答えをききながら、それは感謝であって、尊敬とは違(ちが)うだろう、と書いていました。しかもまだ、感謝するのは早いだろうとも。

人に感謝して何が悪い、と叱(しか)られそうですが、本当に感謝といえる感情が私たちの中に生じてくるのはまだずっと先、何十年も先。多くは感謝すべき相手を失ってからの、と思い知ってしまった私には、たとえばTVのコマーシャルで幼稚園児(ようちえんじ)が声を張り上げて歌う、お母さん、ありがとうといった内容の歌も、大人に言われて歌っているだけのこの上なくあさはかなものに感じられるのです。

もし私に青年期を生きる子どもがいて、その子どもが親である私に⑦しているを知ったら、ましてやこちらを⑧しているなど知ったら、私はそれこそずっとこけてしまうでしょう。

親なる者の愚(おろ)かさゆえ、そうしたことはに出会ったその瞬間(しゅんかん)はほっとうれしくなるかもしれません。でも次の瞬間、おそらくは⑨情けなくなる。そういう親でありたいと思います。生きて生きて生きて、人間(にんげん)になろうと懸命(けんめい)になっているときに、親に感謝しているひまなどない。まして尊敬するなんて、そんなに小さくまとまるなど、私だったら言うだろうと思います。こんな親をこえる存在は世界のあちこちにくれる。今すぐこの親もとを飛び出して、物理的にであれ、精神的にであれ、⑩そういう人たちに会ってこい。

私は、子ども時代、本の中でたくさんの人に会いました。そのころ子どもが日常出会える⑪ナマの人間は、親きょうだいと近所の人、そして学校の友だちと先生。あとはわずかに、ときたま会う親戚(しんせき)の人くらいしかありませんでした。

ところが、本の森に分け入っていくと、そこには子どもの私の想像をはるかにこえた⑫コウキな魂(たましい)をもった人もいれば、とてもない悪党(あくだう)もあり、卑(いや)しさを全身(たたいま)に漂(たぎ)らせる人もいました。しかも同じ人間の中に、その全部が入っていたりもする。別に多重人格のことを言っているわけではありません。人は限りなく神に近くもなれば、限りなく悪魔(あくま)に近くもなりうる。そんなことも、物

語を読んで知っていました。

あんな人になりたい。こんな人になりたい。そんなモデルが見つかっていく一方で、こんな人だけに⑯「ゼツタイ」になるまい、とひそかに誓わざるをえない人にも一人、また一人と出会っていききました。でも、ことはそれだけでは終わりません。次に課題となつて迫つてきた問題は、どうしたら、自分が尊敬（そうず）です。まさしく憧れ、尊敬する人々でした）できる人に一歩でも近づけるかであり、どうしたら逆の人間にならずにいられるかということでした。ただし、これが本格的な課題となつて私に迫つてきたのは、中学生になつてからのことだつたように思います。それで、また本を読みました。本や映画や旅、そして、日々の暮らしを通してのこの課題に因應するための作業は、七〇代に入った今も続いています。

『大人になつておもしろい？』清水真砂子

問一 —— 部①・③・⑪・⑫・⑬のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 部②「実感」とあるが、筆者はどのように感じたというのか。筆者の感じたことをまとめた次の文の□部に当てはまる言葉を文中から三十字以内でぬきだしなさい。（句読点は字数に入れません。）

長年若い人に接してきた筆者は、と感じた。

問三 —— 部④「はく手」とあるが、筆者がここで「はく手」をした理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ある企業の社員みんなが親を尊敬していないという経営者のことは聞いて、賛成できたから。
- イ 尊敬する人について考えたくないために親をあげて満足している若い人を、TVで公然と批判できたから。
- ウ 尊敬する人として親をあげる若い人が多いことを残念に思っている筆者にとって、同意できたから。
- エ 若い人と接する機会の多い筆者にとって参考ができる、さまざまな経営者の考えを聞くことができたから。
- オ 親を尊敬するという若い人のことはほうそであると思つていた筆者にとって、理解できる意見だつたから。

問四

部⑤・⑥に当てはまる語として最も適当な組み合わせを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ⑤ もちろん ⑥ でも
イ ⑤ たしかに ⑥ だから
ウ ⑤ つまり ⑥ また
エ ⑤ たとえば ⑥ そして
オ ⑤ なぜなら ⑥ そこで

問五

部⑦・⑧に当てはまる最も適当な言葉を、文中からそれぞれ漢字二字でぬき出しなさい。

問六 — 部⑨「情けなくなる」とあるが、筆者がこのように感じる理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ことばを聞いた瞬間に、子どもがうそをついていることがわかるから。
イ 子どものことばから、小さな世界で満足していることを感じるから。
ウ 子どもが大人にそのことばを言わされていることを感じるから。
エ 子どもが、明らかに親を喜ばせようとして言っているから。
オ 子どもが、みんなと同じようなありふれた答えをしているから。

問七

部⑩「そういう人たち」とあるが、どんな人たちのことか。解答らんには合うように文中から五字でぬき出しなさい。

問八

筆者は、何のために本を読んでいるのか。筆者の意見を、文中の言葉を使って、十字以上二十字以内で二つ書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

私がウメ子に初めて会ったのは、幼稚園ようちえんのときだった。ウメ子は神戸の幼稚園から転園してきたとかで、園長先生に連れられて、朝の①レイハイに現れた。

私が通っていたのはキリスト教の幼稚園だったので、毎朝、レイハイがあった。先生がひくオルガンの音楽に合わせて大教室——と私たちが呼んでいたいちばん大きな部屋——に集まり、クラスごとに席につく。と、もうひとりの先生が園児の前に立ち、大きな声で、

「では、みなさん。お祈りを始めます」

そう言って両手を組み、気取った様子で目をつむる。続いて、園児全員が先生の真似まねをして両手を合わせ、目を閉じる。閉じなければいけないことになっていた。その間、前に立った先生がお祈りの言葉を述べるのだ。

「天にまします我らの父よ。今日も皆がそろってさわやかな朝を迎えられたことを、感謝いたします」

私は、このお祈りの「まします」という言葉を聞かされたときに、マス寿司を思い出した。父さんが②シユツチヨウに行くとき、よくおみやげを買ってきてくれる、富山とやまのあの丸いマス寿司のことである。

「ほら、お前たち、マス寿司だぞ。うれしいか」

父さんが玄関げんかんで靴くつを脱ぎながら、片手にぶらさげたマス寿司を振ると、決まっておにいちちゃんがおどりをする。

「わあい、マス寿司、マス寿司。てーんにましますマス寿司だあ」

おにいちちゃんも同じ幼稚園に通っていたので、先生のお祈りの文句が頭に焼きついていたのである。何でもおにいちちゃんと同じことをやっていけば間違ちがいがないと信じていた私は、同じように調子をつけて、「マス寿司、マス寿司。てーんにましますマス寿司だあい」と言っていて、おどりにしていた。

だから、レイハイのとき、「まします」と聞くと、吹き出しそうになる。それでもいつもは何とか我慢がまんすることができた。ところ

がその日にかぎって、どうにも我慢ができなかった。なぜかって、前の晩、父さんがシュツチョウから帰ってきて、そのこおどりをしたばかりだったのである。

ゆるむ口元をおさえようとすると、ますますおかしさがこみ上げて、肩が揺れてしまう。先生に見つかったらたいへんだ。どうしよう。これほど困っているのに、^③笑いの神様は許してくださらない。さらに苦しくなり、とうとう^④ゲンカイにきた。気を紛らわそうと首の^⑤カクドをちよつと変えた拍子に、プツと勢いよく口から空気がもれた。まずい。見つかったかもしれない。

^⑥薄目を開けて、まわりを見渡してみた。気づかれたかと思つたが、どうやら大丈夫そうである。だれも私のほうを見ていない。まずはひと安心。となればついでに、年長組のおにいちゃんも吹き出しているかどうか確かめたくなり、薄目のまま、そつと後ろを振り向いた。そのとき、見えたのである。ものすごく派手な赤い服を着た女の子が、ノツポ園長先生に手を引かれて、大教室に入ってくるところを。

それがウメ子だった。

ウメ子を初めて見た瞬間のことをどうしてこんなに鮮明に覚えているのか、自分でも^⑦フシギでならない。が、とにかくウメ子の歩き方、表情、そして何よりその赤い服が衝撃的だった。赤といつても、並の赤ではない。郵便ポストより、赤いクレヨンよりも赤い。しいて言えば、お雛様を飾るときに使う^{注1}毛氈の赤か、クリスマスリースに巻く^{注2}ビロードの赤いリボンの赤に似ていた。しかも、その真っ赤なエプロンドレスの下に着ている、衿の大きくふくらんだブラウスがまた、赤だった。そちらは色が赤いだけでなく、テカテカと光っていて、ウメ子が動いたときに、シャリシャリ音を立てた。

私は薄目を開けたまま、後方から近づいてくるウメ子を見つめた。それほど派手な女の子にしては、いやな感じではない。歩き方は少しだけ内股だが、しゃきつとしていて、童話に出てくる小さなお姫様のように見えた。ちょうどウメ子が私の席の真横を通ろうとしたとき、

「前を向いて、目を閉じなさい」

耳元で低い声が響き、園長先生の大きな手が、私の頭の上にゆっくりと置かれた。

慌てて目を閉じたとたん、「アーメン」という声が聞こえ、お祈りが終わった。ウメ子が園長先生と並んで、みんなの前に立っている。

「それではみなさん、新しいお友達を紹介しましょう。河合ウメ子ちゃんです。今日からうさぎ組のお仲間になります。ごあいさつは？」

みんながいつせいにウメ子に向かって叫んだ。

「おはようございます」

すると、ウメ子はしっかりした声で返答した。

「はい、おはよう」

驚いた。転園生で、こんなにえらそうに、落ち着いてあいさつのできる子を見たのは初めてである。⑧まるで大人みたいだ。おどおどしていない。

ふつうの転園生だったら、最初のうちは新しいところに慣れなくて、⑨しているものだと思うのに、ウメ子はまったくそんな心配が感じられなかった。背丈はさほど高くないが、目が大きくて、⑩眉毛が濃い。髪の毛は真黒だが、西洋人形のようにくりくりとカールがかかっている、男の子と見間違えそうなほど短く切つてある。そんな顔だちのせいか、全体にキリリとした印象で、はくりよく迫力があつた。

こうして午前の部が終わり、お昼ご飯までの自由時間になったときのことである。下駄箱の前で⑪していたウメ子のまわりを、同じうさぎ組のみんなが取り囲んだ。

「あなたの下駄箱は、そつちじゃないのよ。こつちな」

大柄のユカちゃんが、転入生のウメ子に指図した。ウメ子の靴を取り上げると、自分が教えてあげると言わんばかりに、正しい位置に靴を収めようとした。その瞬間、それまで口をつぐんでいたウメ子が大きな声ではっきりと言いつつ放つた。

「⑪自分のことは、自分でやる」

そしてユカちゃんがついてきた靴をひったくったのである。その勢いがあまりに激しくて、ユカちゃんと、そばにいた数人の子がすのこの上に倒れこんだ。どつと泣き声が響き、教室のなかにいた中野先生が飛んできた。

「どうしたの」

⑫「こういうときユカちゃんは、いつもこうなのである。半べそをかきながら先生のそばに駆け寄って、抱きついた。」

「先生、この子あたしを倒したの」

お得意の甘ったれ声で、先生に言いつける。そして、自分がいちばんのひ害者であるかのように、わざとらしく痛みをこらえた顔をしてみせるのだ。

「ウメ子ちゃん、乱暴しちゃ、だめよ」

先生がウメ子に向かって注意した。ウメ子は大きな目をさらに大きく開いて、じっと先生を見すえるだけで、一言も声を発しなかった。先生はそんなウメ子の反応に注、気圧されたのか、すぐさま後ろを振り向くと、今度はみんなに向かって言った。

「ウメ子ちゃんはこの幼稚園にきたばかりだから、慣れてないの。仲よくしてあげてね」

そして、からまりつくユカちゃんを抱きかかえて教室に入っていた。

私はその一部始終を砂場から眺めていた。いつもはだれも逆らうことのできないユカちゃんが、ウメ子にしてやられたのだ。そりゃ、先生はユカちゃんのかたを持っていただけ、負けたのは明らかにユカちゃんのほうだ。あのウメ子のいさぎよい態度を見れば、だれだってそう認める。ほらみる、男の子たちがみんな、ウメ子のそばを離れないでいる。みんな、ウメ子をすごいと思っ
た証拠だ。⑬「こんなに気持ちのいいことは、久しぶりだった。」

『ウメ子』阿川佐和子

注1 毛氈・・・幅が広く、主に敷物に用いる織物。

注2 ビロード・・・なめらかで光沢のある織物。

注3 気圧された・・・相手の勢いに押された。

問一 — 部①・②・④・⑤・⑦のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部③ 「笑いの神様は許してください」とはどういうことか、答えなさい。

問三 — 部⑥に当てはまる最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ちくりちくり イ のらりくらり ウ おそろおそろ エ だましまし オ そろりそろり

問四 — 部⑧ 「まるで大人みたいだ」とあるが、「大人みたいだ」とはどういうことか。文中の言葉を使って二十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 — 部⑨・⑩に当てはまる最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二回用いてはいけません。)

ア よろよろ イ うろうろ ウ そろそろ エ こそこそ オ びくびく

問六 — 部⑪ 「自分のことは、自分でやる」とあるが、このときの「ウメ子」の気持ちとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「ユカちゃん」の言うことよりも、先生の指示通りにしたいという気持ち。

イ 「ユカちゃん」がこわいので、この場から逃げ出したいという気持ち。

ウ 「ユカちゃん」の身勝手なおせっかいに、うんざりしている気持ち。

エ 「ユカちゃん」の言うことが、どうしても理解できない気持ち。

オ 「ユカちゃん」がやさしいので、なんとか仲間に入りたいという気持ち。

問七 — 部⑫ 「こういうときユカちゃんは、いつもこうなのである」とあるが、いつもどのようになるのか。解答らん面に合うように、文中の言葉を使って五十五字以内で答えなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 — 部⑬ 「こんなに気持ちのいいこと」とあるが、どういうことか。三十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問九 次の中から、本文の内容に合うものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」は、朝のお祈りの時にも周りの様子を堂々とうかがうような、こわいもの知らずの性格である。
- イ 「ウメ子」は、童話のお姫様のように派手な服を着ているので、気まぐれな性格である。
- ウ 「私」は、何でもおにいちやんと同じようなことをやっていけば間違いないと思うような、素直な性格である。
- エ 「ウメ子」は、きちんと大きな声ではつきりと自分の気持ちを発言できるので、勝気な性格である。
- オ 「私」は、初めて来た転園生はおとなしくしているべきだと考えるような、ゆうずうがきかない性格である。
- カ 「ウメ子」は、気に入らないことがあるとすぐに乱暴するような、わがままな性格である。